

症例報告

題名：「小児慢性緊張型頭痛患者における薬物療法と理学療法の併用効果と、多面的評価に基づいた医療連携の重要性」

著者： 足立 功浩, 酒井 直人, 金原 一宏, 永井 量平, 伊澤 伸太郎, 中嶋 研人, 今村 美聖, 有菌 佳代子, 高橋 大生, 有菌 信一

要旨

【緒言】本邦における小児及び思春期の一次性頭痛は、有病率や学校欠席率が高く、学業成績低下を来し問題である。本症例は、慢性緊張型頭痛に対し薬物療法単独では不十分で理学療法を併用し、頭痛改善に至ったが、心理的な要因で再度頭痛が増悪して登校困難となった。本症例を経験して小児頭痛患者治療における多面的評価の重要性を認識したので報告する。

【症例】13歳の中学生男子。頭頂・後頭部の頭痛を訴え来院し、頭頸部周囲の圧痛を伴う慢性緊張型頭痛と診断された。薬物療法単独では治療が困難で理学療法が併用された。理学療法初回時の痛み強度はNRS6～7、頭痛頻度は15日/月以上、頸椎X線画像は頸椎側屈と生理的前弯消失、座位姿勢はフォワードヘッドポスチャーであり、後頸部筋群のトリガーポイントによる関連痛を認めた。

【介入および経過】理学療法介入当初の頭痛は、フォワードヘッドポスチャーが長期に継続されたことで後頸部筋群のトリガーポイントが形成され関連痛を認めた。トリガーポイント改善を目的とした徒手療法を中心とした理学療法介入後に頭痛は一旦改善したが、再度増悪を認めた。多面的評価を施行した結果、PCS 反芻17点、拡大視11点、HADS 不安17点、HIT-6は69点、EQ-5D-5Lは0.67であった。登校困難に心理面が関与していると診断され、児童精神科へ紹介となった。現在、頭痛は内服でコントロールされ、学校へも出席可能となっている。

【結語】小児・思春期の慢性頭痛に対しては治療開始前から多面的評価を行い、患者の病状に合わせて治療を施し、適宜、児童精神科と連携することが重要であった。

キーワード：頭痛, 小児・思春期, 理学療法, 心理的評価